

学習者の自尊感情を重視した Humanistic Approach による コミュニケーション活動

飛田ルミ（足利工業大学） 阿久津仁史（文京区立茗台中学） 鈴木政浩（西武文理大学）

キーワード：自尊感情, Humanistic Approach, コミュニケーション

1. はじめに

Humanistic Approach（以下 HA）とは、Moskowitz(1978)がまとめた指導法で、自尊感情を高めながら、他者の価値を認めるように学習者を導く外国語の指導法である。会話練習や英文を書く取組を通じて、仲間や仲間の価値を理解し、人間的理解を深める活動である（鈴木, 2010:39）。本実践・研究は、HA が学習者の英語授業に対する印象にどのような影響を与えるのかを検証する。

2. 問題の所在

Communicative Approach では authenticity と information gap に見られるように情報のやりとりを重視する。これに対して HA は、目の前の仲間の存在という reality と、仲間の存在や互いの価値や価値観の交流を重視する。また、英語でのやり取りの前に、自分の価値や価値観を掘り下げ、仲間を観察することを特徴とする。これは、授業一般で言われるところの、教室内のコミュニケーション形態（米山, 2003:270）（T-S コミュニケーションや S-S コミュニケーション）に加え、鈴木(2011a:51-52)が指摘する自己との対話（内省的コミュニケーション）を重視するということである。こうした特徴を持つ HA の英語授業は、英語でのやりとりを中心とした授業と比べ、学習者の英語授業に対する印象に肯定的な変化をもたらすと考えた。

3. 研究の目的

HA の授業は英語授業に対する印象に肯定的な変化をもたらすことを検証すること。

4. 方法

- (1) 対象者：埼玉県内の私立大学 1 年生 74 名（HA 授業のクラス 32 名、通常クラス 38 名）
- (2) 実施期間：2011 年 4 月から 5 月
- (3) 両クラスとも、通常のテキストを使用した授業（ペアワーク、グループワーク中心）に加え、HA の授業を実施した。HA クラスにつ

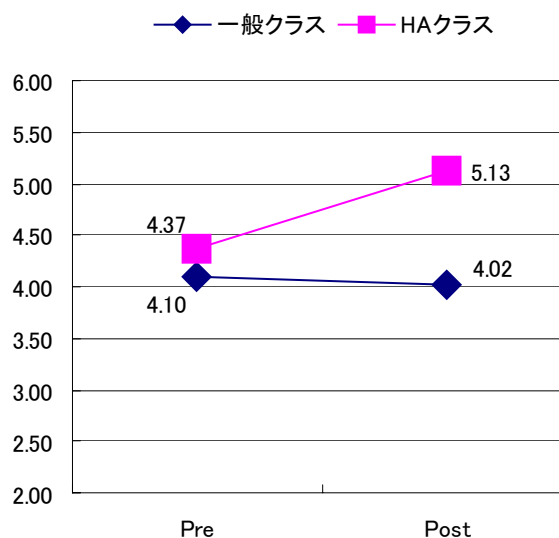


図 1 考える活動とグループ活動の両方がある英語の授業

いては HA による授業を合計 6 回、通常クラスについては 3 回と実施回数を変えた。

(4) 授業実施前と後に、「英語授業の楽しさに関するアンケート」(鈴木,2011b) および、学習者の知能特性を測定する質問紙(恒安他,2010: 186-187)を使ったアンケート調査を実施し、質問項目の平均値にどのような変化が生じたかを分析した(2 要因 2 水準分散分析・混合計画)。

(5) HA の活動例

1) 色の名前をあらわす単語リストから、自分の好きな色を選ぶ。

2) 肯定的な意味を持つ形容詞のリストから、グループ内の仲間が選んだ色から連想する形容詞を書き出す。

3) 選んだ形容詞を使って仲間に対する印象を伝える。

○○ likes (色の名前). (色の名前) means (イメージした形容詞). So I bet ○○ is (イメージした形容詞).

4) イメージした形容詞を使って、グループ内の仲間を英語で紹介する。

5. 結果

「英語授業の楽しさに関するアンケート」の中で、「考える活動とグループの活動の両方がある英語の授業」において、交互作用が有意であり ($F(1,68) = 5.94 p < .05$)、クラス別の主効果が有意であった($F(1,68) = 7.22 p < .01$)。結果を図 1 に示す。

6. 考察

「考える活動とグループ活動の両方がある英語の授業は楽しい」とするアンケート項目の平均値が HA クラスで有意に上昇したことにより、HA の活動は、グループでの取組だけでなく、内省的コミュニケーションを促す可能性を示唆した。

他の活動例や代表的な学生の感想等は当日報告する。

参考文献

Moskowitz, G. (1978) *Caring and Sharing in the Foreign Language Class*. Rowley, MA: Newbury House.

鈴木政浩(2010)「コミュニケーション・アプローチの今後の課題」山岸信義他編(2010)『英語授業デザイン 学習空間づくりの教授法と実践』. 33-43 大修館書店

鈴木政浩(2011a)「『外国語(英語)』の特性と青少年の実状からみた人間的アプローチの必然性」『紀要』第 17 号, 40-60 国際教育研究所

鈴木政浩(2011b)「英語授業の『楽しさ』を構成する要因に関する研究 英語授業学からのアプローチ」第 35 回関東甲信越英語教育学会神奈川研究大会(口頭発表)

恒安眞佐・阿久津仁史・鈴木政浩(2010)「多重知能理論に基づく授業実践事例」山岸他編『英語授業デザイン 学習空間づくりの教授法と実践』180-196 大修館書店

米山朝二(2003)『英語教育指導法事典』 研究社